

「宗教に生きるのではない」

ローマ14章13節-23節

13 それゆえ、今後わたしたちは、互にさばき合うことをやめよう。むしろ、あなたがたは、妨げとなる物や、つまずきとなる物を兄弟の前に置かないことに、決めるがよい。14 わたしは、主イエスにあって知りかつ確信している。それ自体、汚れているものは一つもない。ただ、それが汚れていると考える人にだけ、汚れているのである。15 もし食物のゆえに兄弟を苦しめるなら、あなたは、もはや愛によって歩いているのではない。あなたの食物によって、兄弟を滅ぼしてはならない。キリストは彼のためにも、死なれたのである。16 それだから、あなたがたにとって良い事が、そしりの種にならぬようにしなさい。17 神の国は飲食ではなく、義と、平和と、聖霊における喜びとである。18 こうしてキリストに仕える者は、神に喜ばれ、かつ、人にも受けいれられるのである。19 こういうわけで、平和に役立つことや、互の徳を高めることを、追い求めようではないか。20 食物のことで、神のみわざを破壊してはならない。すべての物はきよい。ただ、それを食べて人をつまずかせる者には、悪となる。21 肉を食わず、酒を飲まず、そのほか兄弟をつまずかせないのは、良いことである。22 あなたの持っている信仰を、神のみまえに、自分自身に持っていないさい。自ら良いと定めたことについて、やましいと思わない人は、さいわいである。23 しかし、疑いながら食べる者は、信仰によらないから、罪に定められる。すべて信仰によらないことは、罪である（ローマ14章13節-23節）。

「宗教」という言葉から人が思い起こすイメージとは何でしょうか。何かしらの経典とか、修行とか、御香の煙とか、あるいはカルト宗教のリーダーとか、テロリストを思い浮かべる方もいるかもしれません。「宗教」と聞くと、このようなイメージを持ち、どこか胡散臭く、敬遠したくなる方は多いのかもしれませんが。

「宗教」に対するイメージの一つに「厳守しなければならないルール」というものがあり、それはキリスト教の中にもあります。しかし「イエス・キリストと私達の関係」はそのようなルールをも包み込むほどに大きなものなのです。そのような意味でキリスト教は「宗教」というよりも、「イエス・キリストとの関係」と言うことができるかと思います。

イエス様はまず父なる神との関係を第一にし、そして、その関係に基づいて、私達との関係を大切にされた方でありました。そうです、そのご愛は律法（ルール）に支配されるものではなく、時にルールよりも私達へのあわれみを大切にされました。そして、このことが多くの敵を作りました。イエス様が十字架に架けられた理由の一つには、律法よりも人との関係を大切にしたことに対する憎悪というものがあげられるかと思います。ルカによる福音書6章1節-5節、そして6節から11節にはこんなことが記されています。

1 ある安息日にイエスが麦畑の中をとおって行かれたとき、弟子たちが穂をつみ、手でもみながら食べていた。2 すると、あるパリサイ人たちが言った、「あなたがたはなぜ、安息日にしてはならぬことをするのか」。3 そこでイエスが答えて言われた、「あなたがたは、ダビデとその供の者たちとが飢えていたとき、ダビデのしたことについて、読んだことがないのか。4 すなわち、神の家にはいって、祭司たちのほかだれも食べてはならぬ供えのパンを取って食べ、また供の者たちにも与えたではないか」。5 また彼らに言われた、「人の子は安息日の主である」。6 また、ほかの安息日に会堂にはいって教えておられたところ、そこに右手のなえた人がいた。7 律法学者やパリサイ人たちは、イエスを訴える口実を見つけようと思って、安息日にいやされるかどうかをうかがっていた。8 イエスは彼らの思っていることを知って、その手のなえた人に、「起きて、まん中に立ちなさい」と言われると、起き上がって立った。9 そこでイエスは彼らにむかって言われた、「あなたがたに聞くが、安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」。10 そして彼ら一同を見まわして、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そのとおりにすると、その手は元どおりになった。11 そこで彼らは激しく怒って、イエスをどうかしてやろうと、互に話し合いをはじめた。

ここを読む時に私達は「安息日」という言葉に目がとまります。これは今日で言うところの日曜日のこととして、当時は土曜日を指しました。そして、その日は聖なる日であるゆえに、働いてはいけないということが当時、厳しく定められていたのです。その定めは細かく、例えばその日には物を持ち上げてはならないとか、歩くのは何歩までとか、火をおこしてはならないというようなことまでルールが定められていました。

そんな安息日にイエス様の弟子達は穂を摘んで食べていたというのです。当時、穂を摘むというのは、その量が多い少ないに関係なく労働として見なされた故に、その弟子達を見た人達は言ったのです「なぜ、あなたの弟子達は安息日にしてはならぬことをしているのか」。

また、ある日、イエス様が安息日に会堂に入って教えておられたところ、そこに右手を動かすことができない人がいました（ルカによる福音書6章6～11）。この光景を見ていた律法学者やパリサイ人達はイエスがどうするか見ていました。当時のルールというのはどんどんエスカレートしていき、安息日に病を癒すことすらも労働と考えられていたのです。そして、この状況から想像できるのに、この右手が動かない人というのもその日に怪我をしたというよりも、もう長い間、そのような痛みの中にいたのではないかと思うのです。ですからその人を癒すためには、別に安息日でなくとも翌日まで待ってもよかったのではないかと思うのです。

しかし、そのような猶予があるにも関わらず、イエスは彼らの思いを知って、この人を会堂のまん中に立たせて言ったのです「あなたがたに聞くが、安息日に善を行うのと悪を行うのとどちらがよいか」。そして、彼を癒したのです。これに対して人々は彼が癒された

ことを喜んだのではなく、弟子たちが穂を摘んで食べた時と同様に激しく怒り、イエスをどうにかしてやろうということが話し合われたと聖書は記録しています。

この安息日に関する律法はよく知られていました。しかし、イエスはその律法をいともたやすく破りました。何によってでしょうか。イエスがその時に共にいた者達に対する愛とあわれみゆえにです。

先にキリスト教は「宗教」ではないと言ったことをご理解いただけたでしょうか。私達はイエス様と律法、すなわちルールによって結ばれているのではなくて、私達はイエス様と愛の関係によって結ばれているからです。

今日、最初に読みましたローマ書14章で問題として挙げられているのは、先週もお話しましたが「何を食べるのか」ということでした。すなわち、当時、信仰ゆえに「きよくないと言われているものは食べない」という人もいれば、信仰を持っていながら「何でも食べる」という人がいたということです。そして、彼らは全然、別々の神を信じていたのではなく、彼らは同じ聖書の神を信じていたのです。ですから、食べない者にとっては食べている者は不信仰だということになりますし、食べている者にとっては食べない者は、また別の意味で不信仰なものだということになるのです。

故に、そこから互いの間に裁き合いが起きてきたということです。だから、このローマ書を書いたパウロはそのような裁き合いはやめよう、互いに妨げやつまづきとなるものを置くのはやめようということです。

ここで確認しますが、パウロ自身が立っている所は明確でした。すなわち14節にあるように「主イエスにあって、私が知り、また確信していることは、それ自体で汚れているものは何一つないということです」ということでした。すなわち、彼は「私は何を食べてもいいのだ。それ自体に汚れているものなどないのだから」ということでした。そして、ここを注意深く読みますならば、このパウロの確信は「主イエスにあって、彼が知っていること」を土台としていたということが分かります。

「主イエスにあって」ということは何のことでしょうか。それはおそらく先にお話したような麦畑や会堂での癒しといったようなイエスの律法に対する自由な姿勢というものがあつたでしょうし、マルコ7章15節-23節においてイエスが言われていたこんな言葉もきっとパウロの心にはあつたのではないかと思います。

15 すべて外から人の中にはいって、人をけがしうるものはない。かえって、人の中から出てくるものが、人をけがすのである。16〔聞く耳のある者は聞くがよい〕。17 イエスが群衆を離れて家にはいられると、弟子たちはこの譬について尋ねた。18 すると、言われた、「あなたがたも、そんなに鈍いのか。すべて、外から人の中にはいって来るものは、人を汚し得ないことが、わからないのか。19 それは人の心の中にはいるのではなく、

腹の中にはいり、そして、外に出て行くだけである」。イエスはこのように、どんな食物でもきよいものとされた。20 さらに言われた、「人から出て来るもの、それが人をけがすのである。21 すなわち内部から、人の心の中から、悪い思いが出て来る。不品行、盗み、殺人、22 姦淫、貪欲、邪悪、欺き、好色、妬み、誹り、高慢、愚痴。23 これらの悪はすべて内部から出てきて、人をけがすのである」。

パウロはこのようなイエス様の言葉によって、食物に関する自分の確信を持っていたようです。ですから彼にとっては何を食べようがそれは全然、問題ではなかったのです。そして、このパウロが何よりもイエス様から学んだことは愛でありました。15節にありますように「あなたの食べ物について兄弟が心を痛めるならば、あなたはもはや愛に従って歩んでいません。食べ物の中で兄弟を滅ぼしてはなりません。キリストはその兄弟のために死んで下さったのです」。この「食べ物」という言葉は私達の身近な他の諸々のものにも置き換えることができます。

マニュアルというものがあります。「この時はこうなさい、ああしなさい」というガイドラインです。このマニュアルはとても便利なものです。しかし、時に私達の人生にはマニュアルでは対応できないことが起きてくるのです。いいや、ある意味そのようなことの方が多いのです。

子育てに関する本はたくさんあります。どれもそれなりのアイデアや子供の行動パターンというようなことを書いています。三回、注意してもまだ悪さをするのなら、タイムアウトしましょうとありましても、その三回の悪さにも色々あります。杓子定規で三回だから駄目とは言い切れないものもあります。育児書に書かれていることが、その子にあてはまるとは限らないのです。本には書かれていないような、思いもつかないようなことが起こる、それが現実の育児であります。

私達はパウロが言っているように愛に従って、そして律法に生きなければなりません。しかし、律法が私達を支配するのではなく、愛の指針に私達は支配されることを目指しましょう。イエスの愛を知れば知るほど、私達は律法に対して自由になります。パウロなどは、このイエスとの愛の関係の素晴らしさを知ってしまったのでしょうか、コリント第一の手紙9章19節—23節において、こんな驚くべきことを言っています。

19 わたしは、すべての人に対して自由であるが、できるだけ多くの人を得るために、自ら進んですべての人の奴隷になった。20 ユダヤ人には、ユダヤ人ようになった。ユダヤ人を得るためである。律法の下にある人には、わたし自身は律法の下にはないが、律法の下にある者ようになった。律法の下にある人を得るためである。21 律法のない人には——わたしは神の律法の外にあるのではなく、キリストの律法の中にあるのだが——律法のない人ようになった。律法のない人を得るためである。22 弱い人には弱い者になった。弱い人を得るためである。すべての人に対しては、すべての人のようになった。

なんとかして幾人かを救うためである。23福音のために、わたしはどんな事でもする。わたしも共に福音にあずかるためである。

私達は自分を変えることを好みません。ましてや相手の立っている場に自分が合わせて立つことをあまり望みません。しかし、パウロはキリストのためにその愛ゆえにユダヤ人にはユダヤ人のように、律法を一生懸命に守っている人達には、自分は律法のもとに生きてはいないけれど、律法の下にある者のようになったというのです。いいえ、彼は全ての人には全ての人ようになったというのです。そして、それは何とかして人々にキリストにある救いを得たいだけだからだというのです。そのために私はどんなこともする、そして、そうすることによって、そのように生きたイエス・キリストの福音に自分もあずかっているのだというのです。

普段、あまり具体的にお話する機会がありませんので、今日はアルコールということの一つ、取り上げてお話ししましょう。時々、酒を飲まないということがクリスチャン信仰にとってとても大切なことかのごとくに「クリスチャンはお酒を飲まないのでしょうか」と聞かれることがあります。

これはクリスチャニティーが「宗教」として受け止められているからです。でも、聖書はアルコール自体を決して悪いものとしては書いていません。パウロも愛弟子テモテに対して、「少しはブドウ酒を飲んで弱った体を労わりなさい」（1テモテ5：23）と書いていますし、イエス様がなされた一番最初の奇跡は結婚式で足りなくなってしまったブドウ酒に対して、水をブドウ酒に変える奇跡でした。

その結婚式にはきっと予想以上の人が集まったのでしょう。その祝いの中にブドウ酒がなくなってしまった。イエスはそのことを聞かれて、水をブドウ酒に変えたのです。「ブドウ酒など飲んでではもってのほか！」と、そこにあったブドウ酒を全部、水に変えるというような野暮なことをイエス様はしませんでした。新郎新婦の結婚を喜んでいる者達の喜びが途切れることなく、その喜びが失われることのないためにイエス様は水をぶどう酒、聖書は最高のブドウ酒に変えたと記しています。

そして、言うまでもなくイエス様自身、日常的にブドウ酒を飲まれました。あの最後の晩餐の時に飲まれたものはブドウ酒で、それが今日の聖餐式となっています。

日本ではお酒を飲みかわすことは、互いの親しみをあらわし、時にお酒の力を借りながらしらすでは表すことのできない互いの本音を分かち合うというような機会となります。これらをふまえて牧師も色々な方達をお酒を飲んだらいいじゃないかと思われる方もいるかもしれません。そうすれば、もっと人は心を開くことができるのではないかと。確かに日本人への伝道をする際、牧師も酒を交わせば、本音をもっと出てくるだろうなとフツと脳裏をかすめることがあります。

しかし、アルコールは反面、問題を抱えています。それが人間関係も自分も窮地に追い込むことがあるのは確かな事実ですし、それゆえに仕事や家庭を失うこともあります。聖書も「酒に酔ってはいけません」（エペソ5：18）とはっきり書いています。罪というものは連鎖するもので、酒に酔うことにより、私達の心身は確かに緩み、余計なことを言ったり、したり、諸々の罪を犯しかねないこととなります。ですから、酒に酔ってはならない、酒に飲まれてはいけないということとなります。誰も自分は酒に飲まれるようなことはないと思って、飲んでいますが、それでも酒に飲まれる人はたくさんいます。時に「酒の席でのことでした」は言い訳にならないのです。

今は「お酒」についてお話ししましたが、このような類のことはクリスチャン生活の中にたくさんあるのです。そして、そのことに対してパウロは14章5節において「各自はそれぞれ心の中で確信を持っておるべきである」とこの箇所において「確信」という言葉を使っています。そして、22節においては「あなたの持っている信仰を、神のみまえに、自分自身に持っていないさい。自ら良いと定めたことについて、やましいと思わない人は幸いである」と言っています。

この言葉に従い私も自分なりに「公の場におけるアルコールに対する自分」ということに対して三つの確信をもっています。この私の確信は私なりに聖書の言葉をふまえて自分なりに得ている確信であり、皆さんもこうしたらいいというようなことではありません。

一つ、それは「クリスチャン、イコール決してアルコールを飲まない人」という考えを純粹に信じている人がいる。それはクリスチャンでない人にもいるし、クリスチャンの中にもいる。もし、その人達の前で私がアルコールを飲んでいけば確かに、彼らはずたづた。私が誰かと会食する度にいつも「テキーラ」を飲んでいたら、喜ぶ人がいるかもしれませんが、づたづた人も少なからずいると思います。パウロが「食べ物で兄弟を滅ぼしてはなりません」と言ったように、私が何を飲むかということによって兄弟姉妹をづたづたさせたくはない、そんなことで兄弟姉妹を悩ませたくはないという確信、それが一つです。

最近、私はよく教会の床に置かれているものに目を留めるようになりました。けっこう皆さん、手荷物が多いようで教会のフロアには色々なものが置かれることがあります。そんなバッグとか、誰かが落としたごみ、なぜそこにあるのか分からない段ボール、私はまだ年齢的にそれらにづたづたすることはありませんが、ご高齢の方達にとりまして、それらはとても危険なものです。1センチの段差も危ないのです。ですから、それらのものが少しでも行く手をはばむようであるのなら、そのことが起きる前に、それをどかしたり、テーブルや椅子の上に、その方達が安心して歩くことができるようにします。そうです、づたづたして怪我をする前に、それをのけるのです。づたづたを防ぐために一番、効力があるのは、そのづたづたの可能性を予め排除することです。

パウロは21節で言っています「肉も食べなければぶどう酒も飲まず、その他兄弟を罪に誘うようなことをしないのが望ましい」。興味深いのはパウロは「絶対だめだ」とは言っていない。体のためにブドウ酒でも飲みなさいと言っている彼はここでは「飲まない方が望ましい」と言っているのです。

なぜなら、彼は酒によって兄弟を滅ぼしてしまう可能性が少なからずあるということを知っていたからです。牧師が酒を飲まないことでつまづく人はおそらくほとんどいません。しかし、牧師が酒を飲んでつまづく兄弟姉妹ならいる。そして、そのためなら私は喜んで飲まないという自由を選択しよう。それがパウロがここで言っている確信だと私は受け止めています。

二つ目、牧師とて人間、飲むことによって言葉と行いによって過ちを犯すかもしれない。それで人を傷つけるかもしれないという確信。信仰をもって飲めば、酔わない、そんなわけありません。誰しも酒を飲めば酔う。そして、とんでもないことをしかねない。そのことで私は牧師職を失うかもしれませんし、家庭を失うかもしれません。余談となりますが、私は昔の友人たちの酒の席に座ることがあります。昔の仲間ということもあり、皆、がんがんと酒を飲み、ある者は心がほぐれて愉快になり、ある者は延々と愚痴ります。そんな中において、私には一つだけ感謝していることがあります。その時に私だけがウーロン茶を飲んでいてしらふでも、したたか酔って気分がよくなっている彼らと同じレベル、いやそれ以上に愉快に、その酒の席において、彼らに酒をついであげることができます。したたか飲んで嬉しそうに話している彼らの姿を見るのは喜びであり、また彼らの愚痴を聞くことも苦になりません。でも、心の中でいつも思っています。もっといいものがあるぞと。

そして、三つ目、しかし、これら二つに加えて自分はただマニュアルに生きるロボットではないということの確信。すなわち、今触れた二つの確信を心に留めながらも、「死んでも飲まない」というように自らを縛るのではなくて、常に自分の心を自由にしておこうという確信です（実際にこの第三の確信に動かされたことが私の牧師としての過去に今まで二度だけありましたし、これからもそのようなことがあるかもしれません。機会がありましたらいつかお話しします）。

最後におそらく皆さんの心の中に起きている疑問についてお話して終わりにしましょう。パウロはここで私達の「確信」、すなわち「自ら良いと定めたこと」について書いておりますが、その確信の根拠はどこにあるのでしょうか。何をもってその確信が正しいと言えるのでしょうか。あの人にもこの人にもそれは分かりません。自分だけが知っています。その確信を確信たらせることは、私達の心の底にある動機が愛であるという確信です。もし、その動機が無私の愛によるものであるのなら、その時に私達は動くべきだ、もしくは留まるべきだとパウロはここで言っているのではないのでしょうか。ここまでお話ししてきましたように、愛は律法を包みこむものなのですから。

先週もお話しました。キリストは私達に自由を与えるために来られました。この自由にはたった一つだけ制約があります。なんだかご存知ですか。それは「愛」という制約であります。そこに主イエスも認める愛があるのなら、私達はその自由を行使すべきです。しかし、その自由が愛に反するのなら、それは制約されるべきでしょう。

愛というものは一つところにおさまりきるようなものではありませんので、一つ一つの状況に合わせて、私達は主イエスの心を知る必要があるのです。そして、その愛は先週もお話しましたように「愛ゆえに何でもよるしい」というようなものではなくて、愛ゆえに時には断固ノーと言いうる愛がそこには含まれるのです。

今日は「飲酒」についてお話しましたが、それは一つの例であり、私達は日々、このような状況の中に立たされます。人生にはマニュアルでは対応できないものがたくさんありますゆえに、我々の上に主の知恵が注がれますように、そして、これが主の御心であるという確信が与えられますようにと祈ります。最後に自らの心にある確信に立つべきであると言ったパウロが書き残しました、我々の確信の基準となりうる言葉を二つ読んで今日のメッセージを終えましょう。

8 互に愛し合うことの外は、何人にも借りがあってはならない。人を愛する者は、律法を全うするのである。9 「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」など、そのほかに、どんな戒めがあっても、結局「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」というこの言葉に帰する。10 愛は隣り人に害を加えることはない。だから、愛は律法を完成するものである（ローマ13章8節-10節）。

コリント第一の手紙12章4節、愛は寛容であり、愛は情深い、また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、不作法をしない、自分の利益を求めない。いらだたない、恨みをいだかない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、全てを耐える。愛はいつまでも絶えることがない（1コリント13章4節—8節）。

この神の愛に照らし合わせて、主に与えられている自由と共に、この世を生きることができますように。お祈りしましょう。